

沖縄県中部の恩納村。

リゾートビーチのすぐそばに横2辺、縦7辺の養殖タンクが100以上も並び、山城武光(80)は早朝から5時間、海ブドウの収穫に汗を流す。

一房ずつすくい上げては丁寧に選別し、ひとりで年間700kg、3万5000食分を出荷する。

「65歳で引退するつもりだった。今も働いているのは海ブドウのおかげ」と日焼けした顔で話す。

体力に合わせて

主要産業だったモズク

養殖はダイバースーツで海に潜り、1日1トをか

シニアが拓く

地域を支える 2

働く場をつくる

以上。全国のスーパーに作り出す。高齢化社会並ぶ村の特産品の養殖はシニアが支える。海ブドウの売上高は1人平均年300万円程度。年金が加われば、生活にゆとりができる。「不安が多かった昔は朝から酒を飲んで、けんかも絶えなかつた。今は皆明るいよ」と

仕事の形柔軟に変化

恩納村漁協の組合員260人の半数以上は60歳シニアが主役となる仕事



山城さんは海ブドウを軽々とすくい上げて収穫する(沖縄県恩納村)

事業主体の第三セクター「いろいろ」には200軒の農家が参加。平均年齢は70歳になる。扱う葉っぱは320種類。朝受

人口1850人、高齢化率49%の徳島県上勝町にシニアの経験を生かす新たな産業が根付いてい

の変化を知っているからできる。100歳まで続けられる」と西蔭幸代(75)は胸を張る。

ITをフル活用

西蔭の1日はタブレット(多機能携帯端末)に届いた注文や価格の確認から始まる。当たり前のようにIT(情報技術)機器を使いこなすシニアたち。いろいろには年間1000万円を稼ぐおばあちゃんもいるという。「動けなくなったと感じたときこそ、インターネットの利便性が享受できる。働き続けるには最低限の知識が必要」。東造し、ネットですべて全国に販

(敬称略)